

# 親子で読んで聴く クラシックギターの童話

## おはなし1 プロローグ「11月のある日」

わたしは今年9歳になる女の子。

お父さんとお母さん、そしてもう一人・・・お母さんのお腹の中には妹がいます。

だから四人暮らし。

それと、ニャンチという名前の白い猫を飼っています。

わたしは、みんなからフーちゃんとよばれています。

名前とはちょっと違うのになぜだろう？といつも思うのです。

11月のある日のことです。

ギターを弾きながら、お父さんが言いました。

「フーちゃん、ギターの曲には『禁じられた遊び』や『アルハンブラ宮殿の思い出』みたいな有名な曲があるけど、ほかにもいっぱい、きれいな曲やかっこいい曲があるんだよ」

わたしは曲のことはよくわかりませんが、お父さんの弾くギターの音が大好きです。

「11月のある日」というギター曲があることをお父さんにおそわりました。

キューバという暑い国の人が映画のために作った、とてもきれいな曲だけど、映画のなかみは国じゅうで戦争が起きていて、そこで戦っていた男の人がもう戦うのがいやになり、そこから逃げ出して病院へ行ったら大変な病気が見つかってしまう。そんなお話だそうです。

「世界は幸せなところばかりじゃなくて、戦争があったり、いくらがんばって働いても生きていくのが、とても苦しい人たちがたくさんいるんだよ。でもそんな時も音楽は生きていく力になるんだね。ギターは身近な楽器だから、うれしい時も、悲しい時もそばにあって、勇気が出たり、気持ちを落ち着かせてくれたりするんだろうね」

と、お父さんは言いました。それから「11月のある日」を弾いてくれました。

わたしは「音楽って何かいいものなんだなあ」と、このごろ思うのです。

そして、そんなギターの曲を大切にしている人たちが、世界中にたくさんいるんだ、と想像すると素敵な気持ちになるんです。

ニャンチがそばにすりよってきて、ジッとわたしを見つめています。

しばらくするとニャンチの鼻の穴から白い煙のようなものが出てきました。

その煙は大きくなったり小さくなったりしています。

ニャンチはお父さんのギターを聴きながら目をつぶって気持ちよさそうに、鼻から煙を出しています。

お母さんはソファに深く座ってお腹をさすりながらウトウトしています。

この頃ちょっと変なことが起きるなあと思うのです。

作・池田由利子（ギター文化館館長）

## 11月のある日

レオ・ブローウェル(1939-

キューバの作曲家、ギタリスト、指揮者



YouTube 動画（演奏：ギタリスト大萩康司さん）